

トマトの夏秋栽培品種‘麗夏’における頂裂型乱形果の発生原因

～夏秋トマトの安定生産に向けて～

夏秋トマトの品種‘麗夏’で発生する頂裂型乱形果は、高温とかん水不足によって助長されることが明らかになりました。このことから、梅雨時期にも適度なかん水を行い、早期から遮光を行うことで頂裂型乱形果の発生を抑えることができると推測されます。

1. 背景と目的

大和高原地域の雨よけ夏秋トマト栽培では、これまで‘桃太郎’系品種が用いられてきましたが、トマトの市場単価が特に高騰する8月下旬以降に裂果が発生することから、代替品種として、果皮が硬く、裂果しにくい‘麗夏’へ切り替えが進んでいます。しかし、‘麗夏’では果実の頂部（花落ち部）が裂けて穴があき、果実内部の組織が露出（図1）・二次肥大（図2）する頂裂型乱形果が多発する年があり、問題となっています。

そこで、夏秋トマトの安定生産に向け、品種‘麗夏’における頂裂型乱形果の発生原因究明に取り組みました。



図1 内部組織の露出 図2 内部組織の二次肥大

2. 研究成果の概要

2021年に、雨よけハウスを用いた栽培試験を行い、かん水方法と遮光期間が頂裂型乱形果の発生に及ぼす影響を調査しました。かん水方法については、7月6日から20日までかん水を停止する停止処理と引き続きかん水する継続処理の2水準、遮光期間については、8月2日から9月7日まで遮光を行う短期処理と7月12日から

9月7日まで遮光を行う長期処理の2水準を設けました。

以上のかん水方法と遮光期間を組み合わせた計4処理区を比較したところ、第6～10果房における発生率は、かん水を停止し、遮光期間が短い処理区で高く推移しました（図3）。

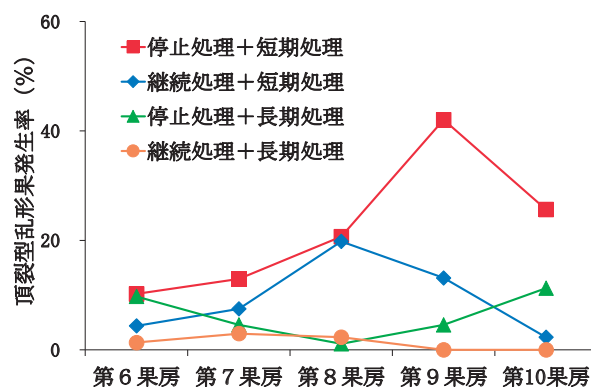


図3 かん水方法と遮光期間の違いが‘麗夏’の頂裂型乱形果発生に及ぼす影響

3. 実用化に向けた対応

本試験では、草勢が強い株において頂裂型乱形果の発生率が高い傾向にあることも観察されました。今後は、草勢の強さと頂裂型乱形果の発生率の関係性を調べ、より具体的な発生対策を示すことで大和高原地域における夏秋トマトの安定生産に貢献したいと考えています。

（大和野菜研究センター 辰巳嘉人）

奈良県農業研究開発センター
ニュース No. 164

2023年6月30日発行

編集発行 奈良県農業研究開発センター
TEL 0744-47-4491(代)
FAX 0744-47-4851
URL <https://www.pref.nara.jp/1761.htm>
印刷 株式会社春日